沼津市明治史料館通信
二〇二三年十月
通巻155号

■ぬまづ近代史点描　86
沼津宿本陣に残された旗本用人の裃
■シリーズ　沼津兵学校とその人材　108
小説家加賀乙彦とその曾祖父永井久太郎
■史料館からのお知らせ

旗本平山図書頭の用人が沼津宿本陣に残した裃
当館蔵

御若年寄格外国惣御奉行
平山図書頭様　御泊
慶応三丁卯年七月　御供功力衡平様
御高百表

肩衣の右裏の墨書部分

ぬまづ近代史点描 86

沼津宿本陣に残された旗本用人の裃

沼津宿の本陣をつとめた間宮家に伝来した資料の中に、「慶応三丁卯年七月」「平山図書頭様御供功刀衡平」という墨書が入った裃がある。平山図書頭とは、当時幕府の若年寄並兼外国総奉行の任にあった旗本平山敬忠（謙二郎、明治期には省斎と名乗る）のことである。

平山の履歴書によれば、慶応三年（一八六七）七月一一日江戸を出立、二〇日に京都到着との行動が判明しているので、途中沼津を通過した際、随行していた用人が何らかの理由でこの裃を残していったものであると推測できる。

平山敬忠
『江戸』第29号所載

その後、平山は八月には軍艦回天に乗船して高知に入り、さらに長崎に向かった。その供には功刀のほか、後に沼津兵学校資業生になる永峰秀樹が京都から加わっていた。甲斐国の村医の子だった永峰は、甲府の徽典館で平山に漢学を学んだことがあり、その縁で家来としての同行を頼んだのだった。平山の長崎行は、外交目的での対馬・朝鮮派遣という幕府の指令が前提となっていたが、諸事情により遣外使節としての渡海は立ち消えとなった。

さて、功刀衡平という用人であるが、永峰は「用人には甲府の本屋の隠居功刀孝平」云々と回想録に書き残しており、同一人物であろう。功刀家は、甲府で村田屋・擁万堂などと称して書肆を営んだ家で、徽典館の御用達だった。そのため、平山と交際し、隠居した当主が用人として仕えることになったのであろう。そして、維新後になると擁万堂は駿河へ進出し、静岡・沼津などで店を開くこととなった。平山が静岡に移住したことが関係しているのかもしれない。静岡の擁万堂は呉服町三丁目九番地にあり、功刀孝とその弟大森弘三郎が経営者だった。沼津の擁万堂は浅間町七番地にあり、その主人を吉成寿三郎といった。三家は一族だったようで、属籍は山梨県平民であり、静岡には寄留する形だった。また、甲州から沼津兵学校に留学した大森俊次の旧名は吉成宮内といい、擁万堂の縁者だったとされる。

功刀孝平（衡平）と孝は、同一人物、もしくは父子であろうか。孝が出版人となって静岡擁万堂から刊行した書籍は少なくないが、沼津兵学校出身者の著作としては、岡田正・倉林五郎編『数学提要』（明治一〇年）、黒川正編『線度面体図解』（明治一一年）がある。また、平山省斎の養子平山陳平、陳平の実兄で甲府勤番・徽典館出身だった旧幕臣磯部物外、省斎の養嗣子平山成信の著作・校閲書が、いずれも功刀・大森・吉成の擁万堂から刊行されていることから（『下等小学日本地誌便蒙』『改正静岡県誌』『仏蘭西法律問答』など）、省斎に連なる甲州での人脈が静岡・沼津で活かされていたことがうかがえる。

静岡擁万堂の功刀・大森は店を三浦定吉へ譲渡したが、沼津擁万堂・吉成氏は寿三郎から権平へと代替わりし、明治二十年代まで続いたらしい。

【参考文献】
『省斎年譜草案』、金城隠士「沼津時代の回顧」（『静岡民友新聞』）、『思出之まゝ』、『維新前後の静岡』、『沼津兵学校の研究』、稲岡勝「加賀文庫本『甲斐名勝志』と甲府書肆村田屋孝太郎」（『書物・出版と社会変容』第一二号）

（樋口雄彦）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　108

小説家加賀乙彦とその曾祖父永井久太郎

小説家で精神科医でもあった加賀乙彦氏（昭和四年生まれ、本名小木貞孝）が、二〇二三年一月に亡くなった。

沼津兵学校第五期資業生永井久太郎（大正六年没・六一歳）の孫にあたる永井久隆氏から、加賀氏が久太郎の曽孫にあたると聞いたのは二〇〇九年のことだった。久太郎の長女はつ江（明治一八年生まれ）が野上八十八（海軍軍医少佐・山口県出身）に嫁ぎ、その間に生まれた娘が加賀氏の母であるとのことである。新聞に掲載された永井久太郎の死亡広告（『東京朝日新聞』大正六年一〇月二一日）には、親戚総代の一人として野上八十八の名があり、そのことが裏付けられた。

加賀氏の自伝的な長編小説『永遠の都』（一九八八～九六年発表、新潮文庫で全七巻、芸術選奨文部大臣賞受賞）には、永井久太郎をモデルとした人物も登場する。主人公の母菊江の父「永山光蔵」がそれである。鉱山技師で山を所有する資産家だったとする点は事実であるが、士族ではないとしているのは事実と違う。作品中では、軍医時田利平（野上八十八がモデル）が永山の豪邸を訪ね、菊江との結婚を申し込む場面があるが、永井が実際に豪邸に住んでいたのかどうかは怪しい。また、時田を永山家に紹介した海軍の先輩「加賀美軍医長」が、永山とは高等学校時代の友人だったとしているのも、史実との間で大きな矛盾がある。この軍医長は、海軍軍医大佐加賀美照太郎（一八六四～一九二一）をモデルとしていると思われるが、山梨県の神職の家に生まれた加賀美と永井とが接点を有したはずはなく、また高等学校で学んだ世代でもない。加賀美の妻は沼津兵学校第四期資業生伊藤直温の長女だったので（野口和子氏のご教示）、伊藤・加賀美を介して永井と野上とがつながったのだろうか、それとも単なる偶然か、はたまた小説の中だけのことか。

若き永井久太郎
（東京大学文書館所蔵・田口文太関係資料）
明治ヒトケタ代の撮影か。沼津兵学校での同窓田口卯吉に贈ったものであろう。

永山は、国内で銅や亜鉛の鉱山を多数発見したほか、鉱石の標本や化石を整理するのを趣味とし、邸宅内に鉱物博物館を設置していたとする。そして、妻に先立たれ孤独な晩年を送り、収集品は上野の科学博物館に寄贈、昭和一一年（一九三六）に亡くなったとされる。収集癖や自宅博物館の有無は不明ながら、少なくとも逝去年については、永井とは全く違う。妻は昭和三年（一九二八）に亡くなっており、久太郎は妻に先立たれていない。おそらく、鉱山技師だったという点以外は、すべて創作なのではないかと推測する。

小説には、菊江の妹藤江と大正元年（一九一二）に結婚した風間振一郎なる人物が登場し、古河合名会社の社員だったとなっているが、これは永井久太郎の四女アイ子を妻にした実業家茂野吉之助をモデルにしたことは間違いなく、結婚の年も事実である（『茂野吉之助』）。先に紹介した永井の死亡広告には、野上八十八と並んで茂野の名前も親戚総代にある。

加賀氏が永井久太郎という人物についてどこまで把握していたのかは疑問である。もし詳しいことを知っていたのであれば、旧幕臣であること、沼津兵学校や工部大学校の出身であること、義妹に最初の女子留学生永井繁子（海軍大将瓜生外吉夫人）がいたことなど、小説の中になにかしらが盛り込まれたのではないだろうか。

なお、永井久太郎については、本『通信』第一〇四号（二〇一一年）も参照いただきたい。

（樋口雄彦）

企画展「地域の歴史シリーズ４」おおひら

令和５年12月９日(土)から令和６年２月25日(日)まで、地域の歴史シリーズ第４弾「おおひら」を開催します。本年、「沼津アルプストンネル」を含む国道414号静浦バイパスの一部区間が開通したことで、今後より発展が期待される大平地区。トンネルを抜けると眼前に田園風景が広がる大平ですが、実は市内屈指の歴史の宝庫でもあります。鎌倉時代から村のできごとが書き連ねられてきた「大平年代記」は全国的にも珍しいものですし、徳川家康の幼なじみ・今川氏真や家康の側室・お万の方などとも縁があります。この機会に大平の魅力にご注目いただければ幸いです。

完成した
沼津アルプストンネル

青く広がる田園風景

駿州駿河郡大平村絵図
沼津市指定文化財
元禄５年(1692)９月
桃源院所蔵

養珠院(お万の方)から
拝領したと伝わる帷子
江戸時代

大平年代記

臨時休館のお知らせ

11月13日(月)から12月８日(金)まで、くん蒸作業及び展示替えのため休館します。

沼津市明治史料館通信
第155号
令和５年10月31日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

明治史料館ギャラリートーク

明治史料館では、2020年度から、毎月第２土曜日の11時からギャラリートークを開催しています。話者は学芸員や学芸スタッフです。皆さんの疑問などにおこたえします。常設展や企画展からテーマを定め、展示室で資料を前に気軽に話しながら、一緒に沼津の歴史を発見していきましょう。もちろん１回のみの参加でも可能です。土曜日のお昼のひととき、史料館のギャラリートークはいかがでしょうか。

令和５年度のスケジュール

月	テーマ
11月	安政の東海地震 ／ 災害・防災
12月	企画展「地域の歴史シリーズ４　おおひら」
１月	企画展「地域の歴史シリーズ４　おおひら」
２月	企画展「地域の歴史シリーズ４　おおひら」
３月	江戸時代の沼津

参加には事前申込が必要です。各回１週間前の土曜日、９時から電話または直接申し込みください(先着15名)。